

## 男子部中等科高等科・高等科混声合唱

### 「音楽会を終わって」

羽山晃生

「祈り」～今回の音楽会の総合テーマです。私は直接的には男子高等科及び男子部全体の合唱、そして女子部男子部高等科の合同の合唱に携わりましたが、それぞれの選曲の理由とテーマを述べてみたいと思います。

#### I. はじめに

##### 1) 男子部高等科男声合唱～神への祈り～

ワグナー作曲 楽劇「タンホイザー」より  
“巡礼の合唱”

この曲は前年度のクリスマス音楽会で演奏し、2年越しで取り組みました。外国作品の男声合唱としては最も知られた曲で、原語がドイツ語であることとPPからFFのダイナミックレンジの広さを表現する新しい試みとして選曲しました。罪を犯した人々がローマに赴き、ローマ法王の許で懺悔を捧げ、許しを得て犯した罪への懺悔と神への永遠の忠誠を誓う合唱です。オペラの舞台では、巡礼する男声合唱が舞台裏から聴こえ、徐々に祈りの拡大とともに舞台上にあらわれて、ffの強い響きで歌い上げられます。学園では毎日礼拝で神への祈りが捧げられていますが、この日々の積み重ねが音楽の中に具現して行けるよう取り組みました。



##### 2) 男子部中等科高等科男声合唱

～戦没者そして反戦への祈り～

鴫

三好達治作詞  
木下牧子作曲

古今東西、全世界では多くの戦いの歴史を繰り返して来ました。そして、沢山の罪のない方々がその犠牲になって行きました。

「鴫」は、日本の合唱界で最も歌われる曲のひとつです。単純なメロディーとハーモニーの中に、何とも言えない哀愁を感じ、その理由は三好達治の詩の中にあると思います。この曲について、ネット上での投稿から引用させていただきます。

戦中、旧制高校の学徒出陣の学生に、はなむけトシテ、当時の著名人を呼んで、講演会を開いていた。そこに三好達治が、講師として呼ばれたが、演台に立った達治は、「なぜ、君たちのような若者が戦場に行かなければならないのか」と言って号泣し、しばらくの間、話すことが出来なかったそうである。鴫（かもめ）とは、旧制高校の夏の真っ白な疑似であり、彼らとは、旧制高校の学徒出陣した学生であることがわかりました。すべて、詩の世界が私の脳裡に広がりました。思いを果たせなかった「恋」旧制高校にあったであろう「食堂」体育館でもある「舞踏室」。鴫とは、旧制高校の学徒出陣した学生魂そのものでした。…ついに自由は彼らのものだ…彼らへの鎮魂歌として、繰り返してはならない戦、反戦の意志を込めて歌いたいと思いました。

以上引用

男子部の学生は、まさに亡くなっていったかもめたちと同世代であり、生徒たちがいただいている幸せは、かもめたちの命の土台の上にあること、両親やすべての周りへの方々への感謝、反戦への思いを強く持っていたいただきたいと、選曲しました。

### 3) 女子部・男子部高等科合同合唱

～世界平和への祈り～

混声合唱組曲「くちびるに歌を」から

”くちびるに歌を”

ツェーザー・フライシュレン作詞（信長貴富訳詞）

信長貴富作曲

この曲は初演は男声合唱で行われ、人気を得た為に混声合唱、そして女声合唱に作曲者自身により編曲されました。ドイツ語の詩を作曲者が訳し、原語と訳詞が交互に展開し、美しいハーモニーを紡ぎだし、素晴らしい融合を見せています。内容としては、常にくちびるに歌をもって、苦しめる人々、悩める方々が共に平和を祈り、幸せになっていきますように。というものです。私たちは日常、祈りの中心が自分自身の幸せに偏りがちですが、常に他の幸せを祈り、他の為に生きることにより、世界平和が実現していくと感じています。この曲を通し、歌うことの喜び、祈ることの素晴らしさを共有したいと選曲しました。音楽会の歴史の中で、高等科のみの混声合唱は初の試みであったと思います。従来は女性、男性がそれぞれ練習し、最後数回合わせて本番でしたが、混声合唱の響きを練習初期から共有し、作り上げようとの運びとなりました。

## II. 実践において

### 1) 男子部

私は最終的に「全員」で取り組む演奏を作り上

げるために、リーダーの育成から始めます。リーダーに必要なとされる力で大切なのは、教師の立場で物事を考える力と、クラス全体を見渡す力を持つことだと思います。今年度高3で音楽リーダーを担当した生徒は、中等科時代よりその才能を發揮し、歌の実力とリーダーとしての力をつけていた。今回の音楽会の男子部としての最大の悩みは「高3の未熟さ」でした。リーダーはしっかりしているが、後のそのほかの生徒はなかなかまとまらず、中等科時代より苦勞の絶えなかった学年でした。男子部の音楽の授業は、週一のクラス授業とコーラスの授業ですが、クラス単位で授業が成立せずに高等科及び男子部全体の向上はありません。私の経験上、クラス授業のキーポイントは、リーダーはもちろんですが、副リーダーからやる気のある10人位の存在。簡単に言うと、各パートを牽引していく生徒と授業態度に波のない生徒が、やる気のない派の勢力にどれだけ感わされなにかかっています。このメンバーが充実してくると、やってもやらなくてもいい生徒たちが芽ぶる式でやるようになります。今年の高3は、この公式には当てはまらず、1学期はなかなか練習に集中せずに私自身悶々とした日々でした。ただ、今年度は高2が当時物凄い勢いがあり、結果的には下からの押し上げの要素の成果もあったと思います。2学期に入り、高3の様子がだいぶ変わって来ました。その要因に副パートリーダーの存在があり、私には良くわかりませんが、かなりのクラスメイトへの働きかけがあったようです。ある時期から、ほとんどの生徒が取り組むようになり、授業態度も積極的になって来ました。本番が近づくにつれ、高3としての意識も高まり、無事に本番を迎えることが出来ました。1年前には想像が出来ないほど、下級生を引っ張り、男子部を1つにまとめてくれました。

今回は、当初から従来のFで歌い上げる段階から柔らかなPPが表現出来ることを目標としていましたが、巡礼の合唱では実現出来たと感じています。鷗では、生徒たちが、等身大の自分を発見したのか、初期の段階から生徒に人気を得て、技術的にはいろいろ難点はありましたが、結果的にいい演奏が出来たと思います。



## 2) 女子部・男子部合同

前述したように、今回音楽会としては初めて高等科のみの混声合唱が実現しました。前回までは最高学部と高等科の合同で混声合唱をやって来ました。授業の進め方としては、各部で練習し、最後本番前に合わせて本番でしたが、なかなか混声合唱の響きを作ることが難しかったです。今回は、1学期から合同の授業を多く設定し、合わせて行くことに時間を使いました。その結果、男女がお互いに音楽を共有する感覚が生まれ、混声合唱の美しい響きを感じるまでに至ったと感じています。精神面でも、一緒に作り上げて行く喜びを生徒たちが体現している実感がありました。



## Ⅲ. まとめ

今回「祈り」をテーマに取り組んで参りましたが、最終的にそれぞれの曲を全身全霊で演奏し、テーマを全う出来たように思います。

音楽会は無事に終わり、今年度が始まり、男子部の授業態度にも、その効果はよい方向に顕れて、取り組んだことは無駄でなかったと思います。本来私たちが取り組んでいる音楽教育の成果は、10年、20年後に存在すると信じます。音楽を学習し体感し、実践したものが、技術面でも精神面でも、音楽を愛し、或いは続けて行くことにより、情操豊かな人間になってくれることを、心から祈りたいと思います。音楽会にご協力いただいた全ての方々、頑張ってくれた生徒たちに心より感謝申し上げます。